

# 『ネパール大震災の民族誌： 共同性と市民性が交わる場で災害に対応する』

伊東さなえ\*著、ナカニシヤ出版、2024年

木村周平†

本書は、2015年に発生したネパール大震災後の対応や支援の動きを記述し、それを「地域（ローカリティ）」という視点から分析した、文化人類学的著作である。著者の伊東氏は2011年から2013年にかけて2年間、青年海外協力隊員としてネパールに赴任したのちに大学院に進学した。本書に関わるフィールドワークは2014年から2018年の足掛け5年、計350日ほど行われたが、本書ではオンラインでのやりとりを通して得られたデータも積極的に活用している、いわば「ハイブリッド」（木村、2018）な著作として、南アジア、特にネパールに関わる研究蓄積と、災害に関わる研究蓄積の交点に位置し、双方に対して重要な貢献をなしている。

まず、本書の内容を概観しよう。本書は序章と終章を含む7章によって構成されている。著者自身の大震災との関わりや個人的関心を述べた短い「はじめに」に続く序章「災害と地域（ローカリティ）：『伝統的なコミュニティ』と『市民社会』が交錯する場」は、本書の理論的な視座を明確にする章である。著者は災害後の緊急対応や助け合いという活動に焦点を当て、それを論じる上での概念である「コミュニティ」と「市民社会」を検討する。そして、いずれもが内と外、伝統と近代、開発と慣習、グローバルな価値観とローカルな価値観といった二分法につながりやすいことを指摘する。そしてそのような陥穽<sup>かんせい</sup>を乗り越え、多様で曖昧なつながりを捉えるために「地域（ローカリティ）」という概念を導入する。著者はアパデュライ（Appadurai, 1996）による議論を下敷きに、「生産され続ける地域（ローカリティ）が、『伝統的なコミュニティ』と『外部の支援者（および彼らが背景に抱える「市民社会」的なもの）』との二分法を超えて、しかし伝統性や文化に対する想像力、土地や神霊との関係を維持したままで復興活動を可能にしていく場となったのではないか」（24頁）と論じる。

第1章「ネパール社会および調査地P村における共同性と市民性をめぐる歴史的・社会的文脈」では、著者のフィールドワークの背景的情報として、ネパールの社会的範疇、親族集団と組織、1950年代以降のネパール国家における行政組織や人々の組織について、および対象地であるカトマンドゥ近郊のP村の概況について、説明する。とりわけ、P村女性協同組合などの「サムダーヤコーム／social work」と呼ばれる、地域（ローカリティ）のために貢献しようとする組織を丁

---

\* 大阪大学大学院人間科学研究科専任講師、立命館大学立命館アジア・日本研究機構客員研究員

† 筑波大学人文社会系教授  
shuhei.kimura@gmail.com

寧に取り上げている。そこからは、人々が「P村」という単一のアイデンティティに属するわけではなく、親族や、トルやグティーなどのローカルな社会的範疇、行政的な「区」や組織など、多層的なまとまりをもとにつながりを形成していることが示される。

第2章「『私はネパール人』：国民国家ネパールと災害ナショナリズム」では、災害直後の「災害ナショナリズム」(Choi, 2015)を論じる。国家主導の、いわば国難への対応が、国内外の支援の動きを一元的に管理・統制しようとしたのに対し、これまでの開発や教育を背景に草の根的に立ち上がったナショナリズムは、「私はネパール人」という想像力を喚起しつつ、地理的には国外に在住する人々も含めて多様な人々をつなぎ、クラウドファンディングなどの創造的な支援活動を可能にした。とはいえこの大きな「われわれ」は、少数民族を敵視・排除する言説とつながったり、政治家に利用されたりするなどの負の側面をはらんでもいたと著者は指摘する。

第3章「地域（ローカリティ）の想像と創造：共同性と市民性が交わる中で生起する復興活動」は、著者の調査地であるP村を中心に、震災発生直後の緊急対応と、様々な復興支援を行った諸集団を取り上げる。そして、それらが第1章で示されていたようなローカルな社会的範疇や行政区域、ないし社会的組織をもとにしながらも「境界もメンバーシップも曖昧な一連の人々によって構成された集団」(89頁)であったこと、こうしたことは従来のコミュニティ・レジリエンス論では十分に捉えられないものであることを指摘する。そして、これらの集団のもつ曖昧さゆえに、しばしば起きがちな分断と排除を回避しえていたと論じる。

第4章「瓦礫と祭り：災害による境界の揺らぎと再構築」は、葬送儀礼の一環であり共同体の祭りでもあり、「地域（ローカリティ）を生産するためのローカル・ノレッジとして機能してきた」(104頁)「牛の巡行」と呼ばれる祭礼を取り上げる。震災発生年、開催が危ぶまれていた「牛の巡行」の開催が決まり、それにあわせて街路から一気にマト（瓦礫、原義は土くれ）が撤去されるという、視角的にも印象的な事態を生き生きと記述する（著者は3ページにわたって計17枚の写真、町中にマトが積み上がっている様子を示している）。「牛の巡行」は震災発生から約4か月後の2015年8月30日に行われたが、著者はこの一連のプロセスが、上述の通り瓦礫の撤去という、開発の理念につながるような公共性をもつ活動を伴っていたこと、それと同時に祭礼として、ローカルなコスモロジーのなかで、コムニタスを生じ、その時間においては生者と死者などの境界を曖昧にしつつも、プロセス全体として社会的秩序を再導入したことを指摘する。

第5章「震災による死を『良い』死にする：地域（ローカリティ）への死者の包摂」は、震災による死者や記念式典の問題を取り上げる。震災直後から1年間の一連の葬送儀礼と、3年後に行われたサプターハと呼ばれる儀礼を取り上げる。そこでは、人々が、明確に言語化しているわけではないが、震災による死を「良い」、いわば日常的な死として取り扱おうとする姿勢が読み取れる。加えてサプターハを催したのが高齢者市民ケア・センターであることから、これが在来の葬送儀礼でありつつ、近代的な公共性を帯びた式典でもあったと著者は述べる。

終章「復興活動が生起する場としての地域（ローカリティ）」はこれまでの議論を市民社会的な「サムダーヤ」および伝統的な「村」という視点から振り返り、この震災をめぐって現れたのが、両者が交錯する多様なつながりとしての「地域（ローカリティ）」であったと論じる。そして人々の生の基盤であり、危機に際しては活動の結節点となる場を、多様なつながりとしての「地域（ローカリティ）」として考えることの可能性を主張する。

以上、本書の内容を概観した。本書の議論の重要な点はいくつもあるが、本稿では次の3つを挙げたい。まず1点目は、いうまでもなく、継続的な現地でのフィールドワークと人間関係に基づくオンラインでの調査を組み合わせ、2015年のネパール大地震後の緊急対応と支援活動を生き生きと、多角的に描き出したことである。日本語での災害に関するエスノグラフィはまだまだ多くない。その意味でも貴重な貢献である。

2点目は、著者が事例を記述するうえで、他社会、とくに日本についての先行研究に積極的に言及することで、ネパールと日本の災害対応を比較し、両者の差異と共通性について考察することを可能にしている点である。例えば「がんばろう日本」と「私はネパール人」のような災害ナショナリズム、緊急対応におけるネットワーク、共同体に区切りと秩序を導入する祭礼などには両社会の間の共通性を見いだせるし、記憶や式典のあり方や「地域（ローカリティ）」のあり方は、日本社会を捉え直すうえでも重要な視座を提供する。

3点目は、著者の以前からの関心を反映した、瓦礫についての着目である。大きくは「瓦礫」として括られるものの中の区分や、その処理の仕方、処理における象徴的意味を丁寧に描き出している点は本書のユニークな貢献である。「瓦礫」や「廃墟」は人新世を人類学的に論じる際のひとつのキーワードになってきたし（チン, 2019）、ゴミについての人類学的研究は徐々に現れてきたばかりである（吉田, 2025）。本書は、災害研究とモノ研究、インフラ研究などとの間の接続可能性を示唆している。

本書の展開可能性という点でいえば、著者が強調する、現場での「多様な・曖昧なつながり」は、さらに議論する余地があるだろう。著者はこれまでの二分法的な枠組みを超えるものとしてこれを強調するが、多様であるという状態を肯定的に強調することは、しばしばその先に議論が進むことを妨げてしまいうる。さらなる議論のための問いを仮に挙げてみると、多様性を支えていたモノや仕組み（インフラ）は何か、実際には排除されていた人やモノはなかったか（P村以外で排除がより行われていたとしたら、何が違ったのか）、多様である状態はどのぐらい続いたのか、何がそれを終わらせてしまったのか（多様性とコムニタスの違いは）、多様とされるものの中にどのような権力関係が見出さうのか（権力をたんに国家や外部との二元論で捉えるのではなく）などがありうるかもしれない。また、本書のキーワードである「地域（ローカリティ）」は、移住などでグローバルに広がるネパールの人々同様に、過疎化・高齢化が進み、外部に住む縁者とのつながりなしに災害からの再建が考えづらい日本の地域社会においても、意義ある概念となりうるだろう。

災害がますます増えるばかりの現在、本書が災害研究者や対応にあたる当事者の間の対話と議論を喚起し、さらに展開させていくことを期待したい。

## 参考文献

- 木村忠正（2018）『ハイブリッド・エスノグラフィー：NC（ネットワークコミュニケーション）研究の質的方法と実践』新曜社。  
チン、アナ（2019）『マツタケ：不確定な時代を生きる術』（赤嶺淳訳）みすず書房。  
吉田航太（2025）『ゴミが作りだす社会：現代インドネシアの廃棄物処理の民族誌』東京大学出版会。

Appadurai, Arjun. 1996. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Choi, Vivian Y. 2015. Anticipatory States: Tsunami, War, and Insecurity in Sri Lanka, *Cultural Anthropology*, 30 (2), 286-309.